

## 《書 評》

Vincent Gabrielsen and Mario C. D. Paganini (eds.),  
*Private Associations in the Ancient Greek World:  
Regulations and the Creation of Group Identity*

Cambridge: Cambridge University Press, 2021, pp. xi+301.

藤 本 俊 哉

古代世界を研究するうえで、任意団体(英語では *voluntary associations* や *private associations* と呼ばれている。日本の研究では、*voluntary associations* の直訳である任意団体が慣習的に使用されているので、本稿でもその訳語を採用する。)は大きな注目を集める対象である。任意団体研究は、任意団体の社交の場としての機能に着目するものから始まった。その背景として、古典期からヘレニズム期へと移ると、ポリスの活動は下火になり、その代わりに私的な領域での活動が増加した、という時代変化の認識があった。その私的な活動の一つとして、任意団体研究初期では、任意団体の活動の活発化はヘレニズム期のポリスの衰退と関連がある、と考えられていた。しかし、コペンハーゲン・ポリス・センターの研究により、ヘレニズム期にポリスが衰退したという考えが改められるなか、任意団体にも積極的な評価がなされてきている。その取り組みの一つとして、コペンハーゲン・アソシエーションズ・プロジェクト (CAP) がある。このプロジェクトは、本書の編者の一人である Gabrielsen が主導し、古代ギリシア世界の任意団体を幅広く収集するものである。CAP の成果は *Inventory of Ancient Associations (CAPIInv)* というオンラインデータベースでまとめられている<sup>1)</sup>。本書の基盤は、編者らが2014年5月にアテネのデンマーク研究所にて主催した学会である。本書では、任意団体の規則に注目して、任意団体を新たな角度から見ることに取り組んでいる。本書については Kloppenborg による書評が存在する<sup>2)</sup>。この書評では主に第1章から第9章までが簡潔にまとめられているが、内容について詳しく評価されているわけではない。そのため、本書評では本書を詳しくまとめ、その後、内容についての評価を試みる。それでは内容に入る前に本書の構成を紹介する。

1 Vincent Gabrielsen and Mario C. D. Paganini, *Associations' Regulations from the Ancient Greek World and Beyond: An Introduction*, 1-38

2 Nikolas Giannakopoulos, *Admission Procedures and Financial Contributions in Private Associations: Norms and Deviations*, 39-62

- 3 Benedikt Eckhardt, Regulations on Absence and Obligatory Participation in Ancient Associations, 63-85
- 4 Jan-Mathieu Carbon, The Place of Purity: Groups and Associations, Authority and Sanctuaries, 86-116
- 5 Stella Skaltsa, Associations and Place: Regulating Meeting-Places and Sanctuaries, 117-143
- 6 Ilias Arnaoutoglou, Greek *thorybos*, Roman *eustatheia*: The Normative Universe of Athenian Cult Associations, 144-162
- 7 Sophia Zoumbaki, Private Affairs in a Public Domain: Regulating Behavioural Code towards Benefactresses and Planning a Strategy of Social Impact in Mantinean Associations, 163-178
- 8 Micaela Langeilotti, A World Full of Associations: Rules and Community Values in Early Roman Egypt, 179-195
- 9 Nikolas Tran, *Ordo corporatorum*: The Rules of Roman Associations and the *collegia* at Ostia in the Second and Third Centuries AD, 196-213
- 10 Kasper G. Evers, Rules and Regulations of Associations: The Eurasian *comparandum*, 214-236
- 11 Vincent Gabrielsen and Mario C. D. Paganini, Conclusion: Associations in Their World, 237-258

本書の大まかな構成は以下のものである。まず第1章では、任意団体についての定義や先行研究の確認を行い、本書の論旨を示している。第2章から第5章では、団体の幅広い側面について考察が行われている。第6章から第9章では、地理的に範囲を限定してケーススタディを行っている。第10章は、ギリシア・ローマ、インド、中国の任意団体の比較を行っている。第11章では、改めて本書の意義を述べている。それでは各章の内容を確認していこう。

第1章「古代ギリシア世界からその先の団体の規則：イントロダクション」では、まず Gabrielsen と Paganini が本書の特徴を紹介している。本稿の冒頭でも述べたように、本書では、団体の規則から団体を研究し、団体が社会・文化・経済に与えた影響を検証する。また、従来の団体研究で扱われていた碑文だけではなく、パピルスも史料として用いていることが特色である。本書の対象とする地域は地中海のギリシア語圏に限定されているのだが、その理由は、①本書が CAPInv のデータを用いているからであり、②検証の目的が同一の文化圏での共通点、差異を明らかにすることだからである。このアプローチで零れ落ちるものを拾うため、オスティアやインド・中国の事例も検証することで新たな知見を取り込もうとした。次に、任意団体の定義を行っている。本書では任意団体を *private associations* と表現している。ここでは、*private* は国家が設立した組織ではなく、国家が運営する組織でもないという意味である。また、従来の研究における任意団体の区分について言及している。従

来は「宗教団体」、「職業団体」などの区分を設けていたが、これらは中世・近世のギルドに影響をうけた区分であり、古代においては団体が複数の役割を果たしていたので、このような区分を設ける必要はないのである。そして、団体の規則として大きく2つの区分を挙げている。一つ目は、団体の意思決定に関わるものを定めた規則であり、二つ目は、団体の会員の行動の模範を示す規則である。最後に、団体と地域社会の関係についても説明を加えている。団体は社会経済的に地域と複雑に絡み合い、相互に影響を与えているのである。

続く第2章から第5章は、団体の幅広い活動に焦点を当てている。第2章「任意団体における入会手続きと財政的貢献」では、Giannakopoulos が団体の入会に関する規則に注目している。本章では①女神ベンデイスの *orgeones*<sup>3)</sup> への入会規則、②ヘレニズム期での団体が課した財政的貢献、③帝政期での事例というように時代別に取り扱い、最後にネットワーク理論と関連する事項を述べている。①-③の分析を通じて、団体への入会の規則と、会員に財政貢献を促す規則は、内部での必要な経費を満たすと同時に、共同体としてのアイデンティティを構築した、と結論付けた。また、入会と公平性の原則はある種の「階層構造」と組み合わせられていたと主張する。財産に応じて課される税とは違って、入会費を一律に課し、会員間の平等性を確保していた。一方で、富者と貧者では、入会金を負担に感じるかどうかは異なり、寄付などによって、富者が団体の活動により大きな影響を与えることができたのである。

第3章「任意団体における欠席と参加の義務についての規則」では、Eckhardt が会員の団体の活動への参加を定める規則と、この規則によって構築される、団体と地域社会の関係に焦点を当てている。本章では、団体を存続させるために、会員に継続的に参加してもらう必要があったことを強調している。参加の義務に関する規則は、団体以外では、類似の事例はほとんど存在しない。免責特権や欠席が認められる場合についての規定は、国家の制度から模倣されたと推測している。規則の施行により、団体は経済的に存続を維持させることができ、会員を維持し続けることが定期的な収入を維持する方法であったのである。また、経済的な要素の他に、信頼の構築を大きな要素として挙げている。古代世界において、団体を信頼維持のネットワークとして位置付けることができると主張する。

第4章「純潔の場：グループと団体、権力、聖域」では、Carbon が神聖な領域に関する規則、特に純潔に関わる領域を取り扱っている。神聖なものに関わる規則は伝統的な習慣や、団体が規制した方法を反映し、特に純潔に関する規則は、秩序を維持することだけではなく、宗教的な共同体への参加を促すことができたと述べている。信仰者の共同体のために、神域へのアクセスや行動を制限・拡大することにより、信者のネットワークを拡大しようとしていたとも推測している。会員の資格として純潔さ、敬虔さ、良い道徳を兼ね備えていることが要求されており、会員の品行方正さを宣伝するとともに、内部でも信頼を築き、結束を高めることに役に立ったと結論付けている。

第5章「団体と場：集会場と聖域の制限」では、Skaltsa が近年の社会学における空間の

定義を活用して、団体がどのように空間を作り出し、自らのアイデンティティを創出したのかを説明している。緊密な関係を築く団体では、秩序だった空間を作り出し、空間の管理と使用を制限する規則を作っていたことが分かった。この空間にこだわっていくことが団体の会員のアイデンティティとなったのである。また、集会場を設定することは会員と非会員との間に区別を設け、使用者の共同体という認識を作り出した。さらに、聖域は同じ記憶や感情を育む場となり、場に愛着を覚えることで所属の意識を強めたのである。空間をどのように整えるのかには、団体の自己認識や自己投影が深くかかわっていると結論付けている。空間は決して静的なものではなく、共同体の活動や経験によって形作られていくものだったのである。

第6章から第9章では、地理的に限定したケーススタディが行われている。第6章「ギリシアの *thorybos*, ローマの *eustatheia*: アテナイ宗教団体の普遍空間」では、Arnaoutoglou が前4世紀から後2世紀のアテナイの「宗教団体」の世界における、秩序だった行動への規制に着目している。*thorybos* は古代ギリシア語で「喧騒、暴動、混乱」など古代ギリシアの社会生活の大きな特徴を表す語であり、対して、*eustatheia* は古代ギリシア語で「静寂、静かな行い」といった意味の語である。アテナイでは、団体はポリスの影響を大きく受けた規則を制定していた。この特徴はヘレニズム期やローマ帝政期でも変わらず、団体はポリスの強い影響下に置かれていた。ローマ帝国は、団体が犯罪者を匿い、犯罪者を逃してしまうことを懸念し、団体に圧力をかけたので、団体は会員間で喧嘩をした者を罰する規定を新たに作り出した。ヘレニズム期の団体は安定性や会員の行動に関心をあまり示さなかったが、ローマの影響で新たな規則を作り出したのである。しかし、ローマ帝政期でも喧騒は民会や法廷などでは当たり前のもので、ある程度のもは容認されていたと推測している。

第7章「公共の領域での私人の問題: マンティネイアの団体における女性の恩恵施与者への行動規範の規制と社会的影響を及ぼす戦略の立案」では、Zoumbaki がマンティネイアの団体を研究し、団体と女性の恩恵施与者の関係を考察している。女性の恩恵施与者への名誉碑文を検証すると、女性の恩恵施与者への名誉や特権が定型的な表現で書かれているだけでなく、会員の行動を規制して、女性の恩恵施与者へ敬意を示すことを促す表現が同様に盛り込まれていたことが分かった。この模範行動を示す表現は単に礼儀や感謝というものではなく、内部の規制を明文化したものなのである。団体は外部の恩恵施与者に対して開かれた存在であり、積極的に共同体の活動に参加してもらっていて、共同体の活動に参加することが特権の中心として位置づけられていることから、道徳的な価値を持つことだけでなく、団体を存続させるためにエヴェルジェティズムを重要視し、恒常的な支援者を確保するための戦略を団体がとっていたことが分かった。

第8章「団体に満ちた社会: 初期ローマ期のエジプトでの規則と共同体の価値」では、Langeilotti が団体の規則に組み込まれた価値を地域共同体・属州の統治機構との関係から検討している。ファイユーム地方のテプテュニスの団体を調査対象とし、団体ごとに規則の特

徴を洗い出した。すると、団体の規則は地域社会の社会的価値を反映していることが分かった。規則には倫理的なものと実務的なものの2種類が見られたが、倫理的規則は単に観念的なものではなく、契約社会のエジプトにおいて核となる価値を持っていた。当時のエジプトにおいては、あらゆる社会階層で自身の所属する地域からの移動が確認されており、団体が信頼を構築する手段となったのである。そして、ローマの属州統治のもとで、エジプトの社会構造は大きな変化を見せており、ローマ期の団体では変化しつつある社会情勢に対して新たな規則が制定された。特に、徴税機構の一端を担う機構として、団体は新たな役割を果たした。このようにして、新たな経済的な規則を施行して、プトレマイオス朝期とは変化をみせたのであるが、伝統的な社会的・倫理的規則は変わらず維持された。

第9章はこれまでのギリシア語圏とは異なり、ラテン語圏での研究となっている。第9章「*Ordo corporatorum*：前2・3世紀のオスティアにおけるローマの団体と *collegia* の規則」では、Tran がオスティアの団体の事例を研究している。オスティアの団体は、自らのアーカイブで規則を管理していたので、現在ではその規則はしばしば失われてしまっているが、本章では団体の会員名簿や顕彰碑文から規則を浮かび上がらせている。この研究から、団体を管理するために様々な支出が行われていたことが分かった。新規入会者を綿密に審査することや、ふさわしくない会員を追放すること、活動・貢納・投票・役職の規制など、様々なことが定められていた。しかし、規則は必ずしもローマの団体の現実を反映しているのではなく、あくまで理想を体現しているに過ぎない。ローマの団体が全て秩序だった集団ではなく、規則は無秩序状態を改善するために導入された背景もあるのではないかと推測している。けれども、このような規則は理想を単に表すだけでなく、団体の会員が保持している共通の価値を反映しており、実際的な役割を果たすことができたのである。

第10章は本書の中では特異な位置づけとなっている。通常の西洋古代史の研究では他文化との比較をすることはあまりなく、比較するとしてもギリシアやローマと深い関わりのあったペルシアやゲルマン諸民族などである。しかし、第10章「団体の規則と規制：ユーラシアでの *comparandum*」では、Evers はインドと中国の団体をギリシア・ローマの団体と比較している。ギリシア・ローマでは紀元後の職業団体を対象とし、インドではアルタ・シャーストラ<sup>4)</sup>に登場する団体を参照し、中国の団体は、後9世紀から後11世紀の唐代後期から宋代初期の敦煌の小作人の仏教を信仰する団体を対象にしている。本章では、この3者の関係について次のように分析している。ヘレニズム期以降、プトレマイオス朝やセレウコス朝は、紅海・インド洋を介してインドと交流し、その影響を受けてインドの商人や職人は団体を結成した。また、後3世紀から後4世紀にかけて、北インドから中国への仏教の伝道活動が活発になり、後7世紀ごろから中国で仏教を信仰する団体が結成され始めた。この3者の共通点として、以下が挙げられている。明文規定の効力は全員によって確認され署名されること、会員は平等であり会員の集会は権力を持つこと、会員に団体の規則を執行する権利があること、などである。また、国家との関係について、ギリシア・ローマの団体とイ

ンドの団体では、同様に国家の法に服しなければならないと書かれていた。そして、3者とも地域社会に根差した存在となり、地域社会の活性化に貢献したと結論付けている。

第11章「結論：彼らの世界での団体」では、GabrielsenとPaganiniが本書の内容を振り返り、重要な点を再度強調している。まず、①団体と国家の関係である。団体は国家の法を模倣し、内部に調和を保とうとした。そして国家の法に従い、国家と対立することを避けてきた。また、国家の役職の名前をそのまま団体の役職の名前に使用したり、国家の行政システムを取り入れたりした。このように、団体は国家を模倣する存在として本書では描かれていたが、団体はすべての面で国家を模倣したわけではない。例えば、団体は会員に全員一律で会費を課していたのだが、国家の課税額は収入によって異なる。恩恵施与者に対しては、国家は必ずしも免税特権を与えるわけではないが、団体は会費の免除や役割の減免など積極的に付与した。このようにして団体と国家にも違いはあったのである。次に、②社会的存在としての団体が果たした役割についてである。まず、団体は伝統を維持する役割を果たした。ヘレニズム期からローマ期に移り変わり、ローマの支配によって社会構造の変革を受けて新しい規則を制定しながらも、伝統は維持し続けた。特に、会員間の平等という理念が変わらず掲げられたことからその様子をよく見ることができる。また、外国人や解放奴隷、女性といった通常社会では大きな力を持たない人々でも、団体の存在があることによって社会に溶け込むことができたのである。そして、③経済において団体が果たした影響である。特にエジプトでは、団体が経済に果たした役割について詳しく見ることができた。団体は会員から会費を集めて団体の運営資金に充てたり、団体が所有する資産を第三者に貸与したりと、団体は経済に深く関わる存在であった。そして、④団体と文化の関わりである。団体は特に宗教面でも大きな役割を果たした。団体は既存の宗教を保護したり、新たな潮流の礎になったりした。また、聖域での活動や聖域の保護でも団体は強い影響を及ぼしていたのである。

以上が本書の紹介である。本書の功績は何よりもまず、団体について制度という目線から新たな切り口を与えたことである。従来の団体研究で制度を扱う場合、個別の団体の制度についての検討に終始するばかりで、本書のように包括的に団体の制度を取り扱うことはなかった。時代や地域を越えて、団体の制度の共通点・相違点を示すことができたことは大きな功績である。また、分析の視点も法制史という分野だけでなく、制度を通じて社会や経済、文化といったものを検討することができる視点は、今後の研究の発展にも非常に有益であろう。特にエジプトのパピルスから得られる団体の情報が豊富であるということがよく示されていた。また、既存の碑文を用いた地域でも、新たな分析の視点を持ち込むことにより、新たな解釈を可能にした試みは大きい。

そして、以前より指摘されている、団体の規則とボリスの法の関係にあらためて着目したことも強調すべきである。本書では、秩序だった団体であるために、そして、そのことを対外的に示すために、団体はボリスの法を模倣したのだと分析されている。第6章では、支配

者がローマ帝国に移り変わると、ローマ帝国の要請に従い、新たな規則を制定したことが論じられている。このように、時宜に適した制度を制定することが、団体の存続に寄与したと他の章でも論じられている。

また団体とネットワークの関係に注目したことも、本書の特筆すべき特徴である。第4章では、団体を中心として、信者のためのネットワークが形成されたということが主張された。また第8章では、団体の集会在、自らが拠点とする村落ではなく、別の都市でも行われおり、そこに地域を越えたネットワークを見出すことができると論じている。このようにして、国家（ポリス、ヘレニズム王国、ローマ帝国）が主体として認識される傾向にあるギリシア語圏において、団体が新たな主体として認識できるということが本書の主題である、と評者は考える。

本書の批判点として、対象となる範囲をギリシア語圏に限定していることが挙げられる。西方のラテン語圏にも任意団体研究の膨大な蓄積があり、それをあまり参照できていないように見受けられた。本書では、西方の事例は第9章のオスティアのみしか取り上げられておらず、もっと幅広い知見を取り入れることができると思われる。

## 註

- 1) CAP: <https://copenhagenassociations.saxo.ku.dk/> (2024年1月10日13時確認)  
CAPInv: <https://ancientassociations.ku.dk/CAPi/index.php> (2024年1月10日13時確認)
- 2) John Kloppenborg, 2022, "Review of: Vincent Gabrielsen and Mario C. D. Paganini (eds.), *Private associations in the ancient Greek world: regulations and the creation of group identity*", *BMCR*.  
URL: <https://bmc.bryn.mawr.edu/2022/2022.09.08/> (2024年1月10日13時確認)
- 3) ベンディスはトラキア人の中で信仰されている月の女神である。ギリシア人にはアルテミス、ヘカテー、ペルセポネーと同一視され、アテナイで祭礼が行われるほど広く信仰された。orgeonesは「宗教団体の会員」を意味する ὄργεών というギリシア語から派生した単語である。
- 4) 古代インドにおける政治や経済などを中心とした学術の総称である。日本では実利論と訳される。代表的な実利論文献は、マウリヤ朝のチャンドラグプタ王に仕えた宰相カウティリヤの作の『カウティリヤ実利論』である。古代インド、とりわけマウリヤ朝時代の社会的、政治的状況を研究するうえで、重要な史料であるとされている。